

第 1 1 講 「不定詞」の本質、『文。』の「簡略的節化」

「不定詞」は、「h e l p」が「t o h e l p」になることだと思っていると、視野は狭く理解が浅薄になり、負けの始まりですよ（「本質」を見抜ける社会人になるべし！）

確かに、「動詞」の「原形」に「t o」をつければよいのですが、そんな局所的・表面的・形式的なことだけで満足してはいけません

「手段詞」によって、例えば、『文。』が「成節詞（「名節詞」と「副節詞」）」により、「名節」「副節」となり、**新たなる高度な活躍の場（転用の場）**を与えられたように、「動詞」を「不定詞」という「活用形」にすることで同様のことが可能になります

「節」の場合は、『文。』完全まるごとでしたが、「不定詞」の場合は、完全まるごとではなく、**軽やかに、簡略的に「名形副化」**させていきます（その性質上「（不定詞由来）準名節」「（不定詞由来）準形容節」「（不定詞由来）準副節」と呼ぶべきもので、それぞれ「不定（準）名節」「不定（準）形容節」「不定（準）副節」と略して呼称します）

ここで、《『文。』の不定詞による「動詞」の活用・転換、転用形態」の場合、元の『文。』の「主語」はどうなるの》という疑問が発生すれば、なかなかのものです

「不定詞」の場合も、『文。』おおよそまるごと「名形副化」できるのです

おおよそというのは、『文。』そのままではなく、①「主語」すなわち「動作主」を《「成句詞」＋「人の目的格」》であらわし、②「動詞」を活用させるという、2つの作業で『おおよそまるごと「名形副化」』させることができるということです
①「主語・主体・動作主」の変形と②「動詞」以外には、いじることはありません
例文でみてみましょう

H e h e l p s o t h e r p e o p l e .

f o r h i m t o h e l p o t h e r p e o p l e

①「h e l p s」が「t o h e l p」になり、②「H e」が「f o r h i m」になるだけなのです（「o f h i m」の場合もあります→第7講「同格のo f」参照）
たった、これだけで、『文。』が軽やか簡略的に「名形副化」していくのです

元の『文。』の「主部」は、原則的には「動作の主体」として、《「成句詞」＋「人の目的格」》という形で「不定詞」の直前に置かれますが、新たな『文。』の主体と一致している場合や一般の人々が主体と考えられる場合は、省略されるのです

以下に、「名形副化」した例文をあげます

It is wonderful for him to help other people .
仮主語 形補 名詞的用法 真主語 [部]

I like for him to help other people .
他動詞 名詞的用法 名目的句 (目的準名節)

a way for him to help other people
中心名詞 形容詞的用法 名詞修飾の形容句 (準形容節)

She spend much money for him to help other people .
副詞的用法 (準副節) 目的 役外状況族

不定詞のまとめ

不定詞	用 法		役 割
	名詞的用法		「主目補」になる
	形容詞的用法		①名詞修飾 (役外装飾族) ②補役
	副詞的用法		場面状況の設定 (役外状況族)

ここで、「不定詞」は「名節」「形容節」「副節」の「簡略化」だということを認識してください

では、各用法について見ていきます

「名詞的用法」の特別な場合・・・「同格」

(「第07講、12講」参照)

the plan that we will go fishing

the plan (for us) to go fishing

「～という」で訳し、前にある「名語句」の具体的内容を説明する「同格」です

「形容詞的用法」の実体

「形容節詞」の場合と同様、「説明したい名語句（「先行詞」）」を元の『文。』から先頭に出し、残りの部分を「不定詞の形容詞的用法」として「先行詞」を「修飾」するのです（「不定詞」の部分は、「形容句（準名節）」ですね）（「構成要素（文役・主目補）」を「先行詞」にすると、「不定詞」内に「欠落」が生じます）

元の『文』

The man wrote a letter with a pen .

①「名主語句」

②「名目的語句」

③ 「副句の後属名語句」

①「名主語句」を「先行詞」とした場合 → 「主格」の「不定詞」

the man 欠落 to write a letter with a pen

②「名目的語句」を「先行詞」とした場合 → 「目的格」の「不定詞」

a letter (for the man) to write 欠落 with a pen

③「副句の後属名語句」を「先行詞」とした場合 → 「手段」の「役外来形容節詞類似」

a pen (for the man) to write a letter with 欠落

ここで、興味深いことに、「形容節詞」と「形容句」の「中間形態」あることに注目してください（辞書参照）

「不定詞」の「形容詞的用法」が「形容節」に近い表現感覚があるということですね

a p e n w i t h w h i c h t o w r i t e a l e t t e r

次に、「時」の「役外来形容節語（関係副詞）類似」のものをみてみましょう

元の『文。』

The man plays tennis at a time .

「a time」を「先行詞」にしてみますが、この場合は、「a t」が脱落します
 習慣的に省略されるようになったのでしょうか（上述の「同格」との違いに注意してください）

a time (for the man) to play tennis (at)

「副詞的用法」の「意味・用法」

「不定詞」の「副詞的用法」の意味は、「～ために」だけではありません

種類	日本語訳	注意事項
目的	～のために	「目的」だど判別しやすくするためには、 「in order」「so as」を前につける
原因 理由 根拠	～して ～するなんて ～するとは ～するには	「形容語」の後ろにつけて、その「原因」「理由」 「根拠」「具体的状況」等を付加する (第17講「あとひき形容詞」参照)
程度	～するには ～するほど	「too・・・ to do」 「so・・・ as to do」 「・・・ enough to do」 等の構文がある(「形副」の具体的程度を示す)
仮定	～すれば	「条件提示文」の「条件節」の「代用」
結果	・・・して(その結果)～	《多くは前から訳していくことを通例とする》

《「程度」をあらわす「不定詞」》

まずは、「so・・・ that ～」の復習です

This question was so difficult that he couldn't solve it .
副 副節 (「so」の具体性を高める)・程度

「この問題は、彼が解くことができなかったほど、そんなに難しかった。」(直訳)

「too・・・ to do」構文で書き換えてみます

This question was too difficult for him to solve .

「この問題は、彼が解くには、あまりに難しすぎた。」(直訳)

「that 節」は完全な『文。』でなければならないので「it」が必要ですが、
「不定詞」は「動作の表示」があればよく「it」は不要で省略されます

(「この問題はあまりに難しかったので彼は解くことができなかった」という訳は何なんでしょうか)

≪「結果」をあらわす「不定詞」≫ → 入試レベルではなぜか頻出なんですね

S h e g r e w u p t o b e a f a m o u s s i n g e r .

「彼女は成長して、有名な歌手になった。」と一般には訳されていますが・・・
（「彼女は有名な歌手になるほどに成長した」が適当な直訳ではないでしょうか）

「副詞的用法」の特別な場合

≪「独立不定詞」≫

一語の「副語」ではあらわせない状況を、「不定詞の副詞的用法」で「独立的」に言いあらわす慣用的な用法で、よく文頭に用いられます（もちろん、「挿入」も可能です）

「t o t e l l t h e t r u t h （実を言うと）」

「t o b e g i n w i t h （まず第一に）」

「t o b e s u r e （確かに）」

等が例としてあげられます

「群副詞」とでも呼べるものでしょう

最後に、いくつか、「不定詞」に関する技術的なことをあげておきます

「不定詞」の「否定」

元の『文。』が「否定文」の場合、「t o」の直前に「n o t」や「n e v e r」を置きます

H e d i d n ' t p l a y t e n n i s .

（f o r h i m） n o t t o p l a y t e n n i s

「代不定詞」

「主節」と同じ「動詞」を繰り返して言うのはわずらわしいので、後ろの「不定詞」の「動詞」は省略します（この状況を「代不定詞」といいますが、実質は「省略不定詞」です）

「to」は絶対に省略しないでください

You may have my lunch if you want to (eat it).

「wh to不定詞」 → 第08講参照

次の例文で示すように、「名節」なのか「不定詞の名詞的用法（準名節）」なのかの違いだけです（「主語」の明示の必要性の有無による）

You must decide whether you buy the book.

You must decide whether to buy the book.

「形容詞的用法」の補足

「補語用法」

下線部はそれぞれ、「主格補語」「目的格補語」と考えられます（第19・21講参照）

He seems to study math .

She asked him to help her friends .

どうでしょうか（「不定詞」という名称は、「名形副の同居」と善解しましょうか）
「不定詞」の実体がつかめたでしょうか
次講では、「能動分詞」の実体に迫ります

「不定詞」という呼称について

「不定詞」という呼称の由来はともかく、「不定詞」では、「動詞」が「活用」によって「名形副化」していくひとつの課程で、形態的にはおなじ「t o d o」のなかに「名形副」が同居していて、実際に使用される『文。』のなかで「名形副」の役割が決められるのです

（実際は、作文者が作文時に既に決めているのですが、読む側が確実に「作文者の真意」を読み取らなければならないのです・・・これが「解釈」ですね・・・「解釈」とは、「文字・文面」を通して、ひとつの事実や価値観や評価を確実に共有できる過程のことです）

形式的・外形的には「名形副」が定まるわけではないという実態からすると、「不定詞」と呼称することには大きな支障はないので、本書では、「不定詞」という呼称を維持します

ただ、「～ing」「～ed」という「動詞」の活用でも、おなじ形態でありながら『文。』のなかで「名形副」が決められていくということは同様なので、「不定詞」という名称を「動詞の活用体系」の上位概念として用いるならともかく、「t o d o」の個別称として用いることは残念です

「分詞」類似のような下位的な命名を検討すべきでしょうか